

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 2 日現在

機関番号：32506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720203

研究課題名(和文)中国四川省西部の同系多言語社会における地域特徴解明のための言語学的調査研究

研究課題名(英文)Linguistic research on the areal characteristics of the languages spoken in the related-multiethnic society in western Sichuan, China

研究代表者

白井 聡子(Shirai, Satoko)

麗澤大学・言語研究センター・客員研究員

研究者番号：70372555

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文): 中国西南部は多くの民族が住む地域で、多彩な言葉や文化が見られる。特に、四川省西部を中心に南北に延びる地域には、文字もなく、研究資料も話し手も少ない言葉が12種類も話されている。

そこで、まず、これらの言葉の姿を明らかにするために、現地に行って、資料の少ない言語の調査を実施した。特にダバ語とギャロン語について、その特徴を詳しく分析した。

また、調査した言語と周辺の言語を比べて、言葉の特徴がどのように分布しているかを調べた。その結果、視点表示システムや重複による脱動詞化といった特徴的な現象の地域的な分布やその成立過程を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文): South-western China is a multiethnic area. We can find a variety of languages and cultures especially in the western Sichuan area, where at least 12 languages with no writing tradition, small number of speakers and few preceding studies are spoken.

I made fieldwork there in order to bring out the details of these languages. Especially I conducted a detailed research on the nDrapa language and the rGyalrong language.

Moreover, I compared the information collected in my fieldwork with documents of neighboring languages to analyze the distribution of linguistic characteristics. In the result, I made clear the areal distribution and the process of the formation of characteristic phenomena, such as the point-of-view system and deverbalization through reduplication.

研究分野：言語学

キーワード：言語学、危機・少数言語、研究者交流(中国)、フィールドワーク、言語地理学、川西民族走廊、チベット=ビルマ語派、チアン語支

1. 研究開始当初の背景

中国西南部は、多彩な言語文化が見られる他民族地帯として知られている。その中で、チベット語・漢語・彝語の境界地帯にあたる四川省西部地域は、特に多様な言語・文化が見られ、言語学、考古学、文化人類学といった様々な学問分野から注目されてきた。

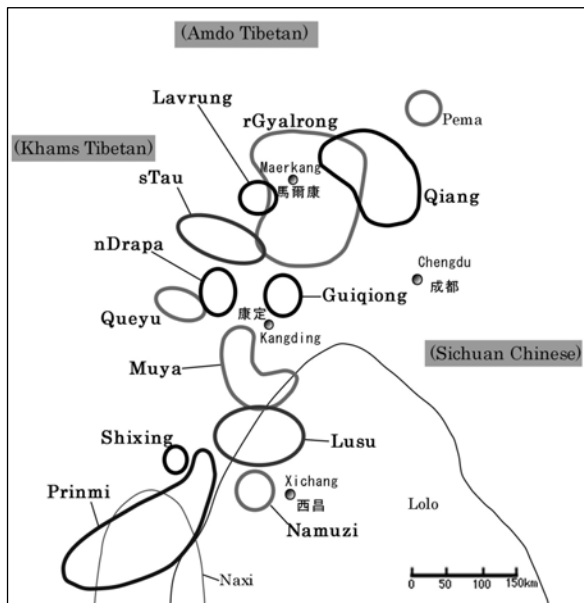


図1：四川省西部の言語分布略図

言語学の観点からは、次のような点が指摘できる。この地域には、チベット語・漢語・彝語という大言語以外にも、少なくとも12の少数民族言語の存在が報告されている(図1参照)。さらに、そのうちいくつかの言語は、相互に理解不可能なほど大きく隔たった方言群を含んでいる。これらの言語はいずれもチベット=ビルマ語派(TB)に属しており、同語派内でも特に複雑な音韻および形態上の特徴を有していることから、通時的・共時的いずれの研究の観点からも非常に重要である。

2000年前後からこの地域の対外開放が進んだことや、内外の学術的関心が高まったことを受け、白井のものも含め、この地域における現地調査を基盤とした新たな記述研究が少しずつ出版されるようになってきた。しかしなお、同地域の言語の多様さと複雑さには全く追いついていないのが現状である。

そのような中で、白井は、記述が特に遅れていたダパ語の調査研究に取り組んできた。さらに、一言語の記述にとどまらず、主に形態統語法上の諸問題について、地域言語学的観点から、周辺言語および遠隔地域の言語との対照を進め、分析を行ってきた。

この地域で話される諸言語が、系統関係が十分に証明されていないにもかかわらず、音韻や形態統語法などに多くの類型論的特徴を共有していることは、言語接触によって形成された地域特徴である可能性が考えられる。しかし、形態統語法を含む包括的な地域言語学的対照研究の試みは、白井の研究を除

いてほとんどなされていない状況であった。

2. 研究の目的

中国四川省西部のチベット=ビルマ系少数派言語が集中する地域において現地調査を実施することにより、それぞれの言語の姿を分析して、どのような言語特徴が見られるかを明らかにする。その上で、それらの特徴がこの地域にどのように分布しているか、地理言語学的観点から分析する。この地域は、同系統(TB語派)に属する複数の言語が話される環境(同系多言語社会)であり、そこに見られる言語の地域特徴には独特の発達経緯があったことが考えられる。そのことを踏まえて、地域の特徴がどのように形成されたのかを分析し、四川省西部の多民族地域における言語学的背景を明らかにする。

この研究によって、記述言語学、言語類型論、地理言語学の発展に寄与すると共に、中国西南部の多民族地帯における歴史学的・人類学的研究にも貢献しう。

3. 研究の方法

まず、中国四川省西部の多言語地帯における言語調査を実施する。ネイティブスピーカーおよび現地研究機関の協力を得て、ギャロン語、スタウ語、ダパ語、グイチョン語の諸方言について、語彙、形態法、統語法、テキスト資料を、音韻表記による記録と音声データの両方の形式で収集する。個別に分析して詳細な記述を進め、言語特徴を明らかにする。複数の言語を扱うことにより、言語対照的な観点から特徴を明らかにしながら記述を進めることができる。

なお、直接に調査できる言語は限られているため、チャン語、プリンミ語など近接地域の言語については内外の研究者との交流を含め最新の研究資料を入手する。

第二段階で、対象地域内の同系ないし異系の言語および遠隔地域の同系言語との包括的な対照研究を行うことで、地域特徴を抽出する。特に、現地調査で得た言語資料、申請者がこれまでに調査してきたデータ、周辺言語に関する先行研究を対照し、注目すべき現象について分析する。特に、話し手と発話内容との関係を表示する視点表示システムや、名詞化現象などに注目する。また、通言語的観点から、日本語などとの類型論的な対照研究を進め、この地域の言語が持つ諸特徴の位置づけを図る。

第三段階で、地域特徴の地理的分布、系統関係との相関などについて分析を進め、地域特徴の形成過程を明らかにする。注目すべき現象について周辺言語も含めて地図上に分布を示し、その分析から、周辺言語との言語接触の状況も含めた形成過程の分析を行う。

4. 研究成果

西南民族大学藏学系、国立民族学博物館の協力を得て、中国四川省における現地調査を

実施した。ただし、甘孜（カンゼ）チベット族自治州、阿坝（アバ）チベット族自治州における現地情勢悪化のため、2012年から2014年にかけては調査実施場所を成都市に変更した。調査地点と対象言語は以下のとおり。2011年9月：アバ・チベット族自治州パルカム県においてギャロン語ボラ方言、2012年2月：成都市においてギャロン語ヨチ方言とダパ語タト方言、2012年8月：成都市においてギャロン語ヨチ方言、ダパ語タト方言、スタウ語マズル方言、2013年5月：成都市においてギャロン語ヨチ方言、ダパ語タト方言、スタウ語マズル方言、2014年7月：カンゼ・チベット族自治州道孚県においてダパ語メト方言、同・康定県においてグイチョン語、成都市においてギャロン語ヨチ方言。

以上の調査資料について電子化を行った。

調査地点の変更によって当初の予定とは調査の進捗が異なったものの、いずれの言語／方言もこれまでに十分な記述がされてこなかったものであり、中国西南部の少数民族言語に関する重要な一次資料であると言える。

調査結果を踏まえて、個別言語の記述、地域特徴の分布・成立に関する考察の両面から研究を進め、成果を発表してきた。

個別言語の記述に関わる研究としては、以下のものがある。

(1) 類型論的観点からダパ語の節連結の分析を行った。特に、節連結とモダリティの関係について記述を行い、その成果を国際学会での口頭発表および論文の形で公表した。また、この研究から発展して、ta という非常に多機能の接続詞があること、この接続詞が「上」を意味する場所名詞 tha が文法化してできたものであることを明らかにした。さらに、並行的な現象が同じ中国西南部で話されるチャン語にも見られることを指摘した。この成果は論文の形で公表した。

(2) ダパ語の名詞修飾構造、名詞化、およびそれらの文法化について、類型論的観点から分析を行った。その結果、ダパ語の名詞句の構造を明らかにしたほか、ダパ語に日本語の文末名詞文（体言締め文）に相当する“Mermaid Construction”が存在することを明らかにした。この成果は、口頭発表および論文の形で公表した。

(3) ダパ語の形容詞には、単純形以外に、語幹の全体または一部を重ねた重複形があり、両方の形が用いられる。文法的には、単純形形容詞は動詞類の一種であるのに対し、重複形形容詞は名詞と同等に扱われる。両者の機能差を分析した結果、単純形は比較を含意し、事象叙述に用いられる傾向があること、それに対し重複形は比較を想定しない場合に用いられ、属性叙述に用いられるということを明らかにした。この成果について、口頭発表をおこなった。

(4) ギャロン語とダパ語について、自動詞・

他動詞の形態論的対応と使役の構造について記述分析を行った。その結果、ギャロン語に使役接頭辞と逆使役接頭辞の両方があり、特に使役接頭辞のうち1つが非常に生産的に用いられることなどを明らかにした。この成果は、国際シンポジウム（ギャロン語）および国内の研究会（ダパ語）において口頭発表で公表したほか、論文を執筆済み、近刊予定である。

(5) ダパ語の文末助詞の全体像を記述した。さらに、周辺言語との対照をおこない、推量の文末助詞 pa とほぼ同形で機能も似た文末助詞がカム・チベット語などにも見られること、いくつかの機能差があることを明らかにした。漢語からの借用の可能性を含めて分析し、口頭発表をおこなった。

また、地域特徴の分布・成立過程に関する研究として、次のようなものを行ってきた。

(6) 四川省西部のチャン系諸言語において、話し手と発話内容の関わりを表示する視点表示システムと、話し手と情報源の関係を表示する証拠性システムがどのように混在し分布しているかについて、地理言語学的観点から分析した（図2）。その結果、同地域には視点表示システムを包括的ないし部分的に持つ言語が多いのに対し、ギャロン語のみ証拠性システムを持っていて視点表示システムを持たないことが明らかになった。このことは、先行研究が指摘するように、ギャロン語の形態統語法を他のチャン系諸言語とは異質のものとする証拠のひとつとなり得る。ただし、スタウ語などは比較言語学的観点から系統的にギャロン語に近いと考えられるにもかかわらず、周辺の他のチャン系言語と同じく視点表示システムを持つ。視点表示システムが系統関係を越えた地域特徴となっていることが伺える。また、南部のプリンミ語についてはいずれの現象も見られない。この成果は、口頭発表の後、ウェブサイトにも掲載した。

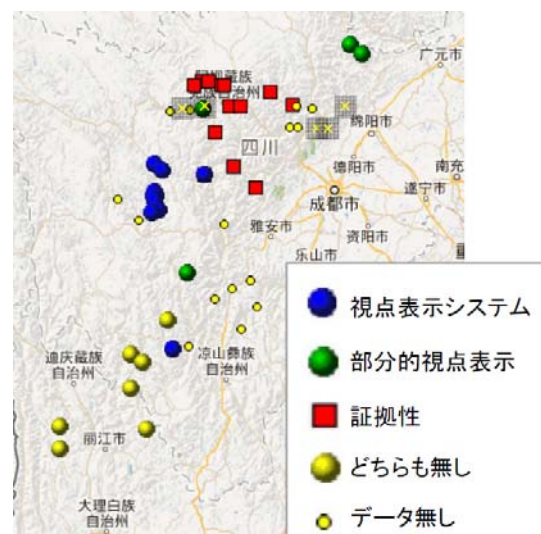


図2：視点と証拠性

(7) 上述 (3) の研究を更に発展させ、中国西部からミャンマーにかけての広い地域で話される 12 のチベット=ビルマ系の言語において、類似の現象が見られるかどうか、またその生産性について、地理言語学的手法により分析した。その結果、南に分布する言語は生産的に重複する傾向があり、西に分布する言語は重複によって脱動詞化する傾向があることが明らかになった (図 3)。この地理的な偏りは、北から重複が非生産的な言語の影響を受け、東から重複が脱動詞化機能を持たない言語の影響を受けた可能性を示唆している。この成果は、口頭発表および論文の形で公表し、一部をウェブサイトにも掲載した。



図 3：動詞・形容詞の重複

(8) 上述 (5) の研究を更に発展させ、対象言語を周辺のチャン系言語に広げ、地理言語学的分析、比較言語学的分析をおこなった。その結果、これらの言語に見られる文末助詞 pa/ba が漢語に由来を持つ借用語であることを明らかにし、ダバ語についてはカム・チベット語を経由した間接的な借用の可能性があると仮説を立てることができた。文末助詞という機能語の借用は、注目に値する現象である。この成果のうち一部 (ダバ語の文末助詞について) は口頭発表で公表済みであり、さらに後半部分 (漢語から中国西南部諸言語への借用について) も発表予定 (採用決定) である。

以上の研究により、中国西南部の少数民族言語における地域特徴の分布とその成立過程が順次明らかになってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

① SHIRAI, Satoko. 2014. “Reduplication and

Nominalization in Tibeto-Burman.” *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. pp. 105-115. (<https://docs.google.com/file/d/0BzeLRjfEMUL-c3RQVjlnZWRRTmM/edit>) (査読無)

② SHIRAI, Satoko. 2013. “Five levels in nDrapa.” In: Tasaku Tsunoda (ed.) *Five levels in clause linkage*, pp. 603-636. Tsukuba: Tasaku Tsunoda. (査読無)

③ SHIRAI, Satoko. 2013. “Mermaid construction in nDrapa.” Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the ‘Mermaid Construction’: Grammaticalization of Nouns* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). pp. 341-370. Tachikawa: National Institute for Japanese Language and Linguistics. (査読無)

④ 白井聡子 2013. 「ダバ語における文の下位分類」澤田英夫 (編) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』. pp. 391-421. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. (査読無)

⑤ SHIRAI, Satoko. 2012. “The polysemic enclitic =ta in nDrapa.” *NINJAL Research Papers* (国立国語研究所論集), Vol.3, pp. 85-101. (査読有)

[学会発表] (計 13 件)

① 白井聡子 2015 年 6 月 20 日 「中国西南部チベット=ビルマ系言語における漢語文末助詞 ba の借用—ダバ語とカム・チベット語を中心に—」日本言語学会第 150 回大会, 大東文化大学(東京都板橋区)

② 白井聡子 2015 年 3 月 15 日 「ダバ語の使役について」2014 年度 第 3 回 TB+古漢語研究連絡会議,立教大学 (東京都豊島区)

③ SHIRAI, Satoko 2014 年 5 月 24 日 “Reduplication as a process of nominalization in Tibeto- Burman.” The 2nd International Conference on Asian Geolinguistics, 24-25 May 2014, Chulalongkorn University, Bangkok (タイ)

④ SHIRAI, Satoko 2014 年 2 月 22 日 “Analysis of intransitive-transitive verb pairs in rGyalrong.” NINJAL Typology Festa 2014, 22-23 February 2014, National Institute for Japanese Language and Linguistics (東京都立川市).

⑤ SHIRAI, Satoko 2013 年 9 月 3 日 “Morphology of adverbial clauses in nDrapa.” 3rd Workshop on Sino-Tibetan Languages of Sichuan, 1-4 September 2013, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, Paris (フランス).

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

「中国四川省西部の同系多言語社会における

る地域特徴解明のための言語学的調査研究」
(Multilingual Area in West Sichuan)
<http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/~sshirai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井 聡子 (SHIRAI, Satoko)
麗澤大学・言語研究センター・客員研究員
研究者番号：70372555

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし